

雨降って、祭さわやか

荒牧町納涼祭

荒牧町だより

第158号
荒牧町自治会
広報委員会

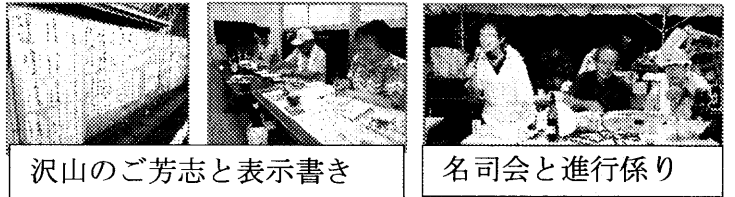


おいしかった～！
おかわり自由

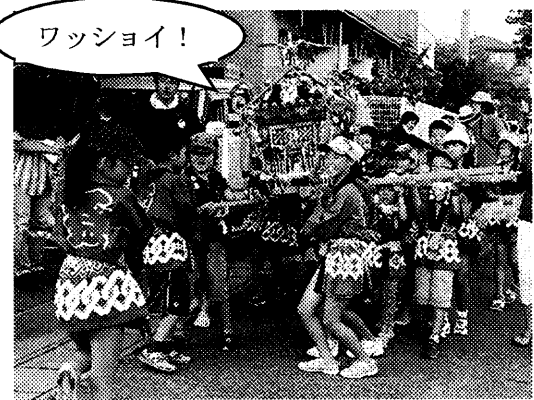
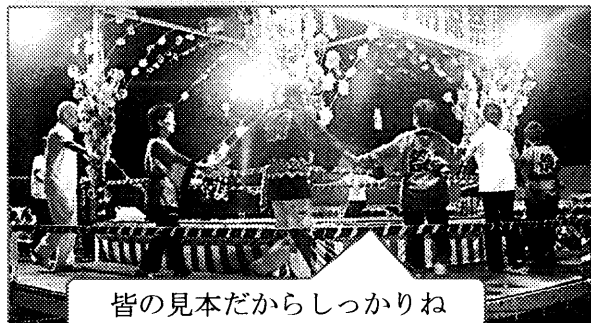
8月1日(土)、猛暑の中、下宿公園で納涼祭がひらかれました。町内をねりあるいたこどもみこしが会場に到着すると、祭が始まりました。

途中、雷雨による中断がありましたが、そのおかげで空気が涼しくなり、さわやかな夏の夜を、歌や踊りやゲームでおおいに盛り上がりました。

ありがとうございます



たのしかった～！



荒牧町納涼祭 終了にあたり

8月1日、多くの皆様のご協力、ご尽力で、今年度の荒牧町納涼祭を開催することができました。雷雨もあり心配させられましたが、皆様の思いが通じ、最後まで行うことが出来ました。かわいい子どもさんのおみこしから始まり、適切な司会・進行のもとで、踊り、歌、ゲーム・クイズを楽しみ、最後に抽選会と・・・、また、テントではおいしい食べ物や飲物、そして語り合いと・・・、寿楽園の皆様はじめ、お祭りに参加された多くの皆様の交流と親睦が図られました。



納涼祭のために、ご芳志を下された皆様及び町内外の多くの事業所や団体の皆様には、心よりお礼申し上げます。また、役員の皆様には、準備から当日の運営そして後片付けまで、多大にご尽力してくださいましたことに、心より感謝申し上げます。

(荒牧町納涼祭実行委員長 後藤 稔)

◎荒牧町の文化発表会のお知らせ

荒牧町文化団体連絡協議会では、毎年、公民館でステージ発表会を開催していますが、今年度は、文化的作品の展示発表も同時に行うことにしました。つきましては、荒牧町にお住まいの方の文化的作品(絵画、書道、短歌、陶芸、工芸など)を募集させていただきます。

文化発表会は11月7日(土)を予定しています。応募要領の詳細は9月15日発行の「荒牧町59号」でご案内をいたします。

9月6日(日)は、**町内運動会**ですよ～!

選手や応援など家族そろって参加してね



あなたの心臓、大丈夫?

心臓に関わる健康講座が開かれました

7月24日、長寿会主催で外山内科の外山卓二院長先生を招いて、「知っておきたい狭心症・心筋梗塞」と題して講座が開かれました。主にスライドを使つての説明で、狭心症や心筋梗塞の自覚症状やその治療法などの説明がありました。

出席者の方々も身につまされる内容であり、真剣に聞き入っていました。



外山先生



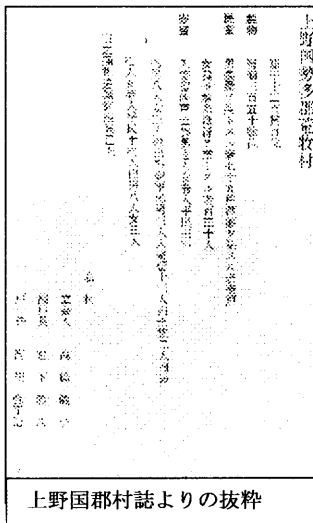
荒牧の地酒、飲んでみたかったなあ

荒牧町に以前あった商家

旧沼田街道は前橋市史等の資料によると、「沼田街道は・・・飛石稻荷の東側を通り上小出、荒牧、関根から田口を過ぎ、現在の国道17号線を横切つて・・・」とある。

これらの上述の四つの宿の詳細については、明治8年6月に国からの通達を受け、本県でも明治10年に「上野国郡村誌」が編纂された。この郡村誌の内容は多くの項目にわたって調査され、これら四カ村の内容も非常に多岐に及んでいる。

この中で、荒牧村には他の上小出・関根・田口の三村に見当たらない項目がある。それは「物産、清酒350駄位」というものである。ちなみに広辞苑によると、酒1駄は3斗5升入りの樽2樽のことである。これを見ると荒牧村には明治10年当時既に2450斗の酒を生産する酒造所があったと考えられる。



上野国郡村誌よりの抜粋

この酒造所は、実は下宿の関口博氏宅で、同氏の話では江戸時代は酒を造っていたという書類も残っている。屋敷も相当広く、自分の家で使う大きな井戸もあったということであり、同氏の家が酒造所であったと考えても間違いなさそうである。残念なことに、明治22年12月、現在の下宿から発生した大火により、酒造所も焼け落ちたため廃業となってしまった。

荒牧まちかど探検・37

次に、上宿の関口弥兵衛氏宅の入口に高さ1.3m余り、径40cm余りと、これよりやや小さい古色蒼然たる立派な壺が二つ並んでいる。同氏の実家は以前から「こうや」と呼ばれている。こうやは勿論「紺屋」であり、昔から実用の着物として愛された藍染めの布を作っていた。染め上げた布は主により渋川より奥の地域で売られていたとの事である。

少し高くなっていた土間に10箇位ならんでいたこれらの壺は区画整理の際、殆どが処分されてしまったが、二つの壺は同氏が大切に保存していたために、立派な歴史の証人になっている。同氏の話では、創業と廃業の時期は定かではないが、やはり明治時代ではないかとの事であった。



関口弥兵衛氏宅の藍壺

故人になられたが下宿の関口維新氏宅も通称「くるまや」と呼ばれ、広瀬川から取り入れた水力で、逞しくも明治時代より大きな水車を回し精米業を営んでいた。この水路は戦時中に防空壕として使われ、多くの人々が避難したこともある大きな水路であった。屋号は「三つ葉屋」と言われた。戦時中は、中嶋飛行機工場の分工場となり精米業は中止せざるを得なかったが、製紙場などを経て、今でも「三つ葉屋」の屋号は立派に残っている。

以上の三商家は現在では全くその跡さえ分からず昔のよすがを偲ぶことは出来ないのが残念である。かつての沼田街道の宿に存在し、立派に村の存在感となっていた創業家であった。

(赤松)